たまにはアーデさん家のリリルカさんが強くてもいいじゃない

ドロップ＆キック

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ふと、今まで書いたことのない題材で書いてみたくなり勢い任せで執筆しました。

結構、流血過多だったりグロかったりエグかったりおバカだったり暴走したりしそうな気はしますが、生暖かい目で見守っていただけると嬉しいです。

一応、短編。とりあえずベル君と出会うまでがゴールかな？

２０１８／８／２４、第０５話を投稿＆二桁話数の目処が立ったので、短編から連載に切り替えます。

目次

第01話：〝アーデさんが鈍器振り回してもいいじゃない〟 ―――― 1
第02話：〝アーデさんがちょっぴりダークでもいいじゃない〟 ―――― 8
第03話：〝アーデさんのスキルが原作と微妙に違ってもいいじゃない〟 ―――― 13
第04話：〝アーデ夫妻が想定以上にクズでもいいじゃない〟 ―――― 19
第05話：〝アーデさんが肉食系（物理）でもいいじゃない〟 ―――― 25
第06話：〝ローガさんに『ありえたはずの現在』があってもいいじゃない〟 ―――― 31
第07話：〝ローガさんが英雄でもいいじゃない〟 ―――― 37
第08話：〝ローガさんが『導きし狼』でもいいじゃない〟 ―――― 43
第09話：〝アーデさんとリオンさんの出会いがダンジョンでもいいじゃない〟 ―――― 48
第10話：〝アーデさんがリオンさんの『共犯者』でもいいじゃない〟 ―――― 54
第11話：〝たまにはルストラさん視点があってもいいじゃない〟 ―――― 60

第１２話：〝アーデさんの呪文が変でもいいじゃない〟 ―――――― 68
第１３話：〝アーデさんがややチートっぽくてもいいじゃない〟 ―――――― 73
第１４話：〝少しだけ寂しい神様と少女の寓話を挟んでもいいじゃない〟 79

第01話：〝アーデさんが鈍器振り回してもいいじゃない〟

「ぺったんぺったん、ロリぺったん♪」

と暢気な調子で自虐的な歌を歌いながら、片方を普通の金槌のように平たく片方をピックのように尖らせた鈍器に身長より長い柄を組み合わせた凶悪なアダマンタイト製ウォーハンマー〝バハムート〟と銘打たれたそれを軽々と陽気に振るうのは、非常に小柄な女の子だった。

その凹凸の少ない肢体を軽甲冑と呼ぶには少々分厚く広く、フルプレート・メイルとするには動きやすそうな……どちらかと言えば〝聖闘士☆星矢〟に出てくる〝白銀聖衣（シルバークロス）〟っぽい特注の鎧に包み（ただし愛らしい素顔は丸出しだが）、手には先ほどの長柄の鈍器、左腰にはソードブレイカーとしてもつかえるメイス〝ファウスト〟を下げ、腰の後には形状と長さは鉈で刃の厚みが鉞という斬るのではなく割断するための刃物〝鬼包丁〟を装着していた。

どれもが中々の逸品でついでに見るからに物騒だが、さらに彼女を特徴付けているのは無邪気に〝バハムート〟を振るうたびに、〝ぐきゃ〟〝ごきっ〟という肉と骨が折れるのではなく潰し砕かれる音が響き、いい年をした男達の悲鳴や泣き声がダンジョンに響いてたことだろう。

音の発生源に視線を移せば、いるのは全身血まみれで横たわりあちこちから皮膚を突き破り骨片が飛び出してる三人の男……見るからに冒険者風、それもどちらかといえばガラの悪い類のそれであった。

「カヌゥさんたちもおバカさんですね～。ダンジョンで怪物進呈（パス・パレード）でもすればリリを証拠も残さず抹殺できると思いましたか？　わざわざこんな物まで用意して」

その視線の先にいたのは、死にかけのキラーアント……無論、危機状態でフェロモンを発生させ仲間を呼び寄せるモードだ。

「も、もう、やめてくれ、リリルカ……」

「はぁ？」

〝ぐりっ〟

「あぐっ!?」

傷口に装甲で覆われた尖ったつま先を無造作にねじ込み、そのまま捻るとカヌゥと呼ばれた男は悲鳴を上げるが、

「誰がリリを親しげに名で呼んでいいなんていいました？」
　冷徹にそう言い放つと、
「ところでリリの手元には、アナタ達から〝奪った〟回復薬（ポーション）があるんですが……どうしてほしいですか？」
「リ……アーデさん、お願いです。ポーションを返してください」
「ほ～う。リリの命を狙っておいて随分と虫のいい話ですね？」
　と小柄な少女はポーションのビンの蓋を外して逆さにし、〝地面に〟中身を落とした。
「テ、テメェ!!」
「テメェ？」
〝ごきっ〟
「あぎゃっ!?」
　軽く振り下ろされた鈍器に再び体のどこかを粉砕され泣き叫ぶカヌゥを冷たく見下ろし、
「カヌゥさん、口の利き方に気をつけたほうがいいですよ？　少しは自分の立場を弁えたほうが身のためです」
　彼女の痛めつけ方は実に理にかなっていた。

身動きとれないように三人の部位を破壊しながら、かといって気絶や出血死やショック死しないギリギリのラインをちゃんと見切っている。

おかげでこのならず者たちは、痛みで逆に気を失うことはできなさそうだ。

これほどの手際のよさを身に着けるために、彼女は一体何人を痛めつけてきたのか……いや、正確に言うなら〝何人、同じファミリアの構成員〟を返り討ちにしてきたのやら。

別にそれは同じファミリアの人間を屠る限りは、「暗黙の了解」とされているので問題はない。

ある意味、〝ソーマ・ファミリア〟は正しく弱肉強食の世界ゆえに、降りかかる火の粉は払わねばあらないのもまた必定。

ついでに襲撃者たちの財貨を命を奪うついでに根こそぎポケットに放り込むのも必然。

ソーマ・ファミリアの一員たる者、稼ぐときは貪欲に、間違っても〝襲われ損〟などになってはならない。

彼女はその不文律の掟を実践してるに過ぎないのだ。

「さて時間もないことですし……そろそろ本題に入りましょうか？」

リリルカと呼ばれた少女はスッと目を細め、
「一体、誰の命令でリリの命を狙ったんです？」
「……」
「黙秘ですか？　いい度胸です」
彼女はバハムート尖ってる部分に文字通り虫の息なキラーアントを引っ掛け、無造作に身動きできぬカヌゥへと放り投げた。
〝がりっ〟
「ぎゃあっ!!」
最後の抵抗と言うよりモンスターの本能に従い、瀕死でありながらもキラーアントは硬い顎でカヌゥの皮膚を食い破った。
激しい痛みに一際大きな悲鳴をあげるカヌゥだが、リリルカは表情一つ変えずに、
「しゃべりたくないなら別にいいですよ？」
チラッとボロ雑巾のような姿で横たわる二人を見て、
「予備のゴミ袋は残り二つありますし」
「わかった！　言う！　だからこれをなんとかしてくれっ!!」
「ならさっさと言ったらどうです？　なんとかするのは話を聞いてからです」

「……ザニスだ！　ザニスのクソ野郎だよっ!!　お前を殺せと命じたのは!!」
ザニス、ザニス・ルストラ。Ｌｖ２の冒険者であり、ソーマ・ファミリアの団長である人間種（ヒューマン）の名を聞いたリリルカだが、ショックを受けるどころかむしろ平坦な反応で、
「意外性も何もあったもんじゃない答えですね～」

（まあ、いくら金勘定を除けば無能で愚鈍なザニスでも、そろそろリリの〝本当のレベル〟に気づいても不思議じゃないですからね）
「そろそろ潮時ですかね？　ザニスの顔も見飽きましたし」
「あ、アーデさん……そろそろ、キラーアントを、し、死ぬ」
捕食されかけているカヌゥが懇願するが、リリルカはクセっ毛の茶色の髪からにょきっと生えた〝本物の犬耳〟をピクッと動かし、
「助けてあげたいのは山々なんですが……」
彼女はニヤリと笑い、
「どうやら時間切れ（タイムアップ）みたいですよ？」
彼女のシアンスロープだった父親譲りの鋭い聴覚が捉えたのは、這い寄る死の気配……無数のキラーアントの足音だった。

リリルカ・アーデ

ソーマ・ファミリアに所属していた犬獣人族（シアンスロープ）の父親と小人族（パルゥム）の母親の間に生まれた、生粋のソーマ・ファミリアの構成員。

備考：〝冒険者〟

第０２話：〝アーデさんがちょっぴりダークでもいいじゃない〟

ダンジョン……それは富と栄光、そしてそれを求めたツワモノどもの欲望と策謀が渦巻く場所……

今日もオラリオのダンジョンは、多くの命を飲み込んでゆく……

「これだけいたぶれば当然ですが……やってきましたよキラーアントの団体さんが」

どこか楽しげに、そして嬉しげに嗤うリリルカに対し、逃げるために必要な筋肉と骨を破壊されたカヌゥ・ベルウェイと他ソーマ・ファミリアのモブ２名は今度こそ顔色を完全に失った。

「あ、アーデさん、まさか俺たちを置いていかないよなっ!?　助けてくれるんだよなっ

!?」

必死の形相で懇願するカヌゥに、

「あっはっはぁ♪　何を言ってるんです？　リリがカヌゥさんたちを置いてくわけないじゃないですか」

「だ、だよな！　俺たちは同じファミリアの、」

〝仲間〟だなんて薄ら寒いセリフを言わせる気も聞く気もなかったリリルカは、

「〝カヌゥさんたちが生きたままモンスターにパクパクされる〟なんて面白いショーを、リリが見逃すとお思いですか？」

「き、き、き、貴様ァ!!?」

「リリは別に〝リリの命を狙った黒幕〟の正体をしゃべったら助命する〟なんて約束してませんよ？」

とそ知らぬ顔で言い放ち、

「とはいえリリも鬼でも悪魔でもありません」

とカヌゥたちから根こそぎ奪い取ったポーションの一本を弄びながら、

「ポーション以外の装備は残しておいてあげますから……」

そして満面の笑みで、

「精々抵抗してみてくださいね？　その方がより楽しめますから♪」

楚々とゴミ3体から距離を取り、高みの見物を決め込もうとするリリルカの背中に、
「呪われろっ!!　地獄へ堕ちろ!!」
とカヌゥたちの怨嗟の声が飛ぶが、
「はは～ん。今更何を言ってるんです？　生まれ乍らのソーマ・ファイリアの団員だなんて、それだけで十分に呪いですし、地獄は既に経験済みですよ」
と鼻で笑うだけだった。

☆☆☆

悲鳴と嗚咽と絶叫……生きながらに引き裂かれ、貪られる苦痛と恐怖の宴が始まったが、それも長くは続かなかった。
そんな地獄絵図を肴に携行食を齧れるリリルカも、相当に肝っ玉だか神経だかが図太いようだが。
「まっ、こんなもんですか」
特に感慨も無くリリルカは独りごちる。
（リリの財産を何度も盗もうとしてきたどうしようもない愚物どもですが）

「いざ終わってみると、〝呆気ない〟って感想以外は出てこないもんですね～」
（まあ、これもリリが同じ手で何度も始末してるからでしょうけど）
弱ければ奪われるのが当たり前、弱肉強食のルールが生きるソーマ・ファミリアでは「奪うほうが悪いのではなく、奪われるほうが悪い」のだ。
実はリリルカはカヌゥ達を恨んでたわけではない。ただ、たまらなく鬱陶しかっただけだ。
そしてリリルカはその〝強さ〟を極力隠すように行動してきたため、割と狙われることが多かった。
今日までカヌゥとその取り巻きは、リリの得体の知れなさを警戒したのか基本的に「盗もう」としていただけで、直接的に暴力的な手段は用いてこなかったが……
だが、団員の中にはより直線的に、あるいは短絡的に襲撃し、リリルカから強奪しようとした。
そんな時は、リリルカは決まってダンジョンに逃げ込み……いや、誘い込み、
「ホント、ダンジョンもモンスターも便利ですよねえ。死体の始末に困らないのが何より助かります」
キラーアントを使ったのは今日が初めてだが、種類を問わなければダンジョンの〝本来の住人達〟に後始末を任せるのはむしろリリルカの常套手段だった。

無論、アフターケア……襲撃者達が遺した財産も、可能な限り奪うのも忘れない。

何せ現世にいないのなら、俗物的な財産など不要だろう。あの世に金貨は持っていけない。

なら、現世にとどまった勝者である自分が使ってやるのが礼儀であり、供養なのだとリリルカは考えていた。

「それにリリはモンスターって大好きなんですよ♪　生ゴミの後始末もしてくれる上……」

〝ブォン！〟

身長より長い柄の付いた巨大なアダマンタイト製の鈍器のついたウォーハンマー〝バハムート〟……間違いなく１５０ｃｍに届かぬ彼女の体格なら持ち上げることさえ難しいそれを、リリルカはバトン・トワリングでもするように片手で風を切らせて回し、

「リリの経験値（エサ）にまでなってくれるんですから!!」

両手で構えなおし、カヌゥ達を平らげたキラーアントの群れに突っ込んだ!!

第０３話：〝アーデさんのスキルが原作と微妙に違ってもいいじゃない〟

「奪い奪われまた奪って……そうやってウチのファミリアは回ってるんです。まったく馬鹿げた話ですよね？」

ある日、リリルカ・アーデはそう皮肉げに嗤った。

本来、ウォーハンマーは〝分厚い鎧ごと敵を叩きのめす〟ことを目的に考案された鈍器だ。

そういう意味では硬い甲虫のような外皮を持つキラーアントを文字通り〝叩き潰す〟には、まさに打ってつけの得物といえるだろう。

加えてリリルカのウォーハンマー〝バハムート〟は、形状こそ片方は平面状もう片方はピック状というウォーハンマーとしては一般的なものだが、規格外とも言えるヘッド部分の大きさは、彼女が本気で振るえば明らかに人間相手にはオーバーキルになるだろう。

そうそれは、明らかに対モンスター用に拵えた物だろう。

そしてその予想にたがわずリリルカとバハムートのコンビは、カヌゥ達を平らげた後もまだ足りぬと波打って襲い掛かってくるキラーアントの群れのど真ん中で、凄まじい勢いの殺戮を広げていた。

リリルカがバハムートを振り回すたびにキラーアントの体の部位が必ず破壊され、ある固体は胴体を一撃で潰され四肢を飛び散らせながら灰に変わり、またある個体はピック部分で頭を穿たれた挙句、首の上を千切れ飛ばされた。

背後から彼女を襲おうとする個体もいたが、リリルカはニヤリと笑い、槍の穂先のように鋭く研がれた円錐状の石突を振り返りもせずに無造作に突き刺すだけで制してみせる。

その動きはとても洗練されていると同時に容赦なく、彼女が小さな肢体（からだ）でどれほどの修羅場を潜ったのかを物語る。

まさに正しく一撃必殺のオンパレード、少しばかりキラーアントが不憫に思えてくる

から不思議だ。

不思議なのは小柄な彼女の身長よりも長く、彼女の体重よりも重いかもしれないアダマンタイト製のハンマーヘッドを持つこの鈍器を、リリルカがこうも容易く、まるで竹箒でも振舞わすように扱っていことだ。

種を明かせばどうと言うことはなく、主にスキルの恩恵だった。

そのスキルの名は、

〝剛力無双（ゴリアテ）〟

原作と呼ばれる世界で、リリルカアーデが持っていた〝縁下力持（アーデル・アシスト）〟とは似て非なるスキル、リリルカ・アーデと言うシアンスロープとパルゥムのハーフである小さな少女が、〝Ｌｖ１の冒険者〟となった瞬間に発現し、長年共に歩んできた……パートナーのようなスキルだった。

ゴリアテを英語読みすれば〝ゴライアス〟になることを考えれば、なるほど少なくとも平和的な能力でないことはわかるだろう。

何しろアーデル・アシストが力を補正するスキルなら、ゴリアテは〝力を倍化（ブースト）〟するスキルなのだから。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「まっ、こんなものですか……」

まるで、「軽く一汗かきました」とでも言いたげな表情のリリルカ。

キラーアントの群れを比喩ではなく全滅させた後、戦闘の邪魔にならないように岩陰に隠していた〝まるでサポーターが使うような〟巨大な革製背嚢（レザー・ザック）を引っ張り出し、リリルカはキラーアントの存在証明でもある魔石を限界まで詰め込み、ついでにキラーアントが食べ遺したまだ使えそうなカヌゥたちの遺品も駄賃代わりに回収する。

どうせ死を悼み悲しむような遺族などいないことはわかりきってるのだから、魔石共々後腐れないように換金するつもりだった。

せめてその金で精々、行きつけの〝豊穣の女主人〟で普段より少し豪華なディナーを

楽しむことがせめてもの手向け……なんてどうでもいいことを考えながらリリルカはダンジョンを後にする。

巨大なウォーハンマーに割と重装な甲冑、各種装備に加え、体が隠れるほどの魔石を満載にしたザックを背負いながらも、リリルカの足取りは軽く、まるで今にもスキップを始めそうな雰囲気だった。

☆☆☆

スキル〝剛力無双（ゴリアテ）〟

リリルカ・アーデが持つスキルの一つで、彼女しか発現が確認されていない希少（レア）スキル。固有（ユニーク）スキルの可能性もあり。

その効果は、

・本人が装着／装備する総重量に比例し力が倍力（ブースト）される。

・力の熟練度（パラメータ）とレベルにより倍力（ブースト）率が上がる。

・倍力に対応した身体強度補正が行われる（ブースト状態でも骨折や筋肉断裂が起きないよう補正）

・力の熟練度上昇率が〝上限に関係なく〟倍化され続ける。

備考：物心付いたころ、あるいは付く前より重装備を背負わされ、両親に連れられダンジョンに潜っていたために発現したスキルと推察。

つまり、リリルカ・アーデは冒険者になる前から〝両親のサポーター役〟としてダンジョンに潜らされていた。

第０４話：〝アーデ夫妻が想定以上にクズでもいいじゃない〟

「はあ？　両親、ですか……率直に言って、ソーマ・ファミリアではありきたりな団員。世間一般で言えば普通にクズでしたね」

リリルカ・アーデと言うシアンスロープとパルゥムの混血である少女にとって、ダンジョンは物心付く前から稼ぎ場であり鍛錬場であり、何より生活の場だった。

例えば、彼女の最も古い記憶は、「ダンジョンの中でナイフの握り方を母親から教わっていた」というものだった。

無論、それは料理なんて平和な目的のためじゃない。

紛れも無く「モンスターを刺し殺すために必要な」握り方だった。
『リリはですね、キャベツの切り方より先にゴブリンの刺し方を教わったんですよ。だからリリは幼い頃、刃物はモンスターを殺すためにあると思ってたんです。刃物が料理に使えるって知ったのは随分後だった気がします』
彼女は二本の脚で立って歩けるようになった直後から、両親の手で浅いダンジョンの階層に連れ出されたらしい。
無論、将来〝貴重な戦力〟とするためにだ。
彼女の父も母も、ソーマ・ファミリアの主神ソーマが生み出す〝神酒（ソーマ）〟に夢中だった。
恋し焦がれ、その味と匂いに溺れていた。
そしてそれは、生まれた一人娘に対する親愛よりも遥かに濃厚な感情だった。
故に両親がリリルカを〝ダンジョン・アタックに有益な道具〟として育てようとしたのも、ある意味においては合理的な判断なのかもしれない。
『確かにお父さんやお母さんから親としての情を感じたことはなかったかもしれませんね。何しろ、教わったのは効率のいいモンスターの殺し方や魔石の確保の仕方、あるいは同じソーマ・ファミリアの団員をどう出し抜くか？　どう財産を奪われたり盗まれないようにするか？　そんなのばかりでしたし』
悲しいぐらい寂しさを感じない口調……

それは、その両親との距離感こそが〝彼女の普通で日常だったことを、何よりも雄弁に物語る。

そう、彼女はそんな殺伐とした日常を当たり前だと思っていたのだ。

『ああ、だからと言って別に両親を恨んではいませんよ？　むしろ感謝してるくらいですし。例えば、リリの鋭い嗅覚と聴覚はお父さん譲りですし、エルフほどじゃないですが魔力適性の高いパルゥムの血もしっかり出ています』

公平に見て、リリルカ・アーデと言う少女は〝遺伝学的な傑作〟と評していい。

嗅覚と聴覚は父から、魔力資質や器用さは母から、またどちらの種族も俊敏性が非常に高い特色がある。

本来、リリルカは俊敏性を活かした前衛型のスピードファイターが適役だったのかもしれない。

だが、その〝ありえたはずの未来〟を捻じ曲げたのも、また両親だった。

物心ついたかつかないかの頃のリリルカを連れ、ダンジョンに潜ったのだ。

そして、まだ冒険者になるほどの地力を持っていなかったリリルカにサポーターとしての役割を担わせた。

無論、動けなくなるほどの荷物を背負わせたことはない。

ダンジョンで身動きが取れないということは死に直結だ。いくらなんでも〝無駄死・

死なせ損〟をさせる気はなかった両親は、それなりの加減もした。
まあ、ソーマ・ファミリアの冒険者たちのサポーターに対する扱いを考えれば、随分と良心的だろう。
今にすれば、それこそが両親がリリルカに対して見せた仄かな親の情だったのかもしれない。
少なくともリリルカは、幼き日々より幾多の死線を潜り抜け、無自覚のまま己を磨いた。
そして結果、リリルカが晴れて冒険者としての道を歩み始めたときに発現したのが、レアスキル〟剛力無双（ゴリアテ）〟だった。
『考えてみれば……リリが冒険者になれたのも、両親がくれたロクでもない経験のおかげだったのかも知れませんね？』

☆☆☆

親子三人となったパーティーだが、リリルカにとってそれは〟それまでの日常〟に劇的な変化を齎すようなものではなかった。
ただの荷物持ち（サポーター）ではなく娘が戦力に数えられるようになったため、その分稼ぎが増え

た……彼女だけでなく、アーデ一家にとってその程度の話だった。

そして増えた収入は娘のために使われることはなく、全て神酒（ソーマ）へと消えた。

そしてその増えた戦力を過信したからこそ、犬獣人族（シアンスロープ）の父と小人族（パルゥム）の母は寿命を縮めることになった。

明らかに当時のリリルカが加算されても無謀なダンジョン・アタック……ドロップ・アイテム狙いのその挑戦の対価を両親は命で支払う羽目になる。

誰のせいでもない。

他のファミリアの団員に裏切られたり陥れられたわけでもなければ、どこか別のパーティーに怪物進呈（パス・パレード）を喰らったわけでもない。

純粋なる自己責任ゆえの結末だった。

『でも、不思議なんですよ。両親が目の前でモンスターに食い殺されているのに、リリの感情は全く動きませんでした。勿論、自業自得とも思ってましたし、薄々いつかこうなるだろうなとは思ってましたが……』

そして、両親の凄惨な死を目の当たりにしても、リリルカは冷静だった。

そして、冷静に生き残る方策を選び続けた。

『その時ですよ。リリが自分で〝どこか壊れてるんだ〟と自覚したのは。両親の死を目の前にして何の悲しみも寂しさも浮かんできませんでした。ただ、淡々と追撃をかけて

くるモンスターを振り切り、ダンジョンからの脱出と生還だけを考えていました』

アーデ夫妻の死を悼むものも、リリルカの生還を喜ぶものもソーマ・ファミリアにはいなかった。

リリルカもそれを当然と受け入れていた。

両親も団員も所詮は同じ〝モノ〟……ダンジョンから帰還したリリルカの目には、そう言いたげな冴え冴えとした冷たい光だけが宿っていた。

だが、ここで〝奇妙な親心〟を出す存在が現れる。

他の誰でもない。本来であればファミリア全体の〝親〟でなければならない……そしてそれを完全に放棄していた神ソーマだった。

自分と同じ目……無味乾燥の視線で他の団員を見ていたリリルカに僅かな興味と憐憫を覚えた神ソーマは、こっそりと人目につかぬようリリルカを自分の私室へ呼び寄せ、一杯の酒盃を振舞った。

そしてその一杯……〝完成された神酒〟が注がれた一杯こそが、リリルカの運命を大きく変える、あるいは狂わすことになることを、彼女も彼も知ることはなかった。

第05話：〝アーデさんが肉食系（物理）でもいいじゃない〟

「ガッポガッポにしてやんよ～♪」

なんて珍妙な歌を歌いながら、上機嫌で魔石の換金を終えてギルドから出てくる我らがリリルカさんである。

本来なら彼女、もっと換金レートの良い市場の業者に流しても良さそうなものだが、そこはそれ。ギルドに定期的に顔を出すというのは、色々と金銭以上のメリットがあったりするのだ。

ちなみにカヌゥ達から奪った品々は、ギルドに来る前に別口の昵懇な〝怪しげな商人（盗品請負人）〟に流して換金済みだ。

入手経緯が違うのなら売り先も変えるのは別に不思議な話じゃない。

それにヘタに強奪品を持ってギルドに入り、それがやけに世話好きなガネッ娘ハーフエルフの目に留まったらかなり面倒になること請け合いである。

自分にない〝無償の優しさ〟を持つ彼女をリリルカは好ましく思っているが、だからと言って自ら進んで面倒臭い目にあいたいとは思ってはいない。

ソーマ・ファミリアの多数の団員達は一人（ソロ）でダンジョンに潜り、彼女が丸ごと入ってなお余る革製背嚢（レザーザック）にはちきれんばかりの魔石を詰め込んで毎度帰って来るリリルカを凄まじい金持ちだと思い込んでいるようである。

そしてそれに目がくらみ、襲い掛かって返り討ちに合い、身包みや財産を迷惑料として根こそぎ剥がされるまでが様式美（デフォ）なのだが……

だが、そのイメージに反してリリがもつ財貨は、身につける装備や武具／各種ポーションなどダンジョン攻略に必要なアイテムを除けば、彼女と同レベルの冒険者が持つそれと比べても常識的な範疇だ。

この世界のリリルカは、ソーマ・ファミリアを抜ける気はない。

主神のソーマを除けば、関心すらない。積極的に抜けようとするほどの重みも感じない。

主神を除けばファミリアなぞ所詮、ただ名を置いてるだけ……だから脱退のために金を溜める必要もない。

どこぞのギルドを仕切ってるエルフとは名ばかりの肉塊と違い、金を溜め込むことを自分の存在意義と考える守銭奴でもない。

無論、〝神酒（ソーマ）〟ごときに大枚を払うほど落ちぶれてもいない。
「宵越しの金を持たない」などと嘯くほど傾奇者思考でもない。
というより、リリはどちらかと言えば堅実な思考の持ち主だ。
それでは彼女は何に金を使うのか？
答えは既に書いた気もするが……基本、〝強くなる〟ためにリリルカは金を惜しげもなく使う。
具体的には武具、装備、そしてダンジョンに入るのに必須な各種消耗品だ。
例えば彼女が使う、アダマンタイト製のヘッド部分がリリの頭よりも大きいウォーハンマー〝バハムート〟は、有名どころの一級冒険者が持っていても不思議じゃない逸品であり、またそれに相応しい価格を誇る。
何しろ鍛えたのは某有名鍛冶系ファミリアであるわけだし。
他にもファミリア外の〝師事を仰いだ強者達〟に支払う謝礼なんてのも、彼女なりの金の使い道だ。
リリルカ・アーデと言う少女は強くなる……〝強くあろうとする〟為に余念がない。
可能な限り金に糸目はつけようとしないし、妥協は可能な限りしない。
それを呼吸するように自然に行うのがリリルカ・アーデであり、その根本にあるのは「弱肉強食」だろう。

ダンジョンとファミリア、彼女の二つの生活の場においてそのルールは当たり前であった。
なら、目の前で両親がモンスターに食い散らかされた彼女が無意識に「被捕食者であるより捕食者でありたい」と願うのも当然とだった。

☆☆☆

だが、そんなリリルカにも人には誰もがあるような〝生きる楽しみ〟くらいはあった。
その一つが……

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

リリルカは各種ハーブで絶妙な味付けがされた巨大な肉の塊を大きめに切り分け、口の中に放り込む。

「んまいっ♪」

咀嚼するたびに口いっぱいに広がる上質な肉特有の甘味と旨味に、リリは舌鼓を打ちつつ自分が生きていることを実感する。

ここは多くの冒険者にとって安らぎと食欲を満たす場所（酒場）、その名を〝豊穣の女主人〟。

値段はやや割高なれど、どの料理も味は折り紙つきだ。

リリルカの生きる喜びの一つは、〝美味い食事を腹いっぱいになるまで堪能〟すること。

呆れるほど小市民的な発想だが、天涯孤独になった頃からソロ・アタックの果てに生きて帰った自分へのご褒美として〝豊穣の女主人〟で食事をとることにしていた。

そして今では店の常連、いや常連の中でも古株の分類に入るまで店に通っていたのだった。

まあ、この〝豊穣の女主人〟に通いつめる理由は、味だけでなく〝昔馴染みの友人〟に会うためでもあるのだが……

その友人の話は別の機会にでも譲るとして、

店の片隅にある二人がけのテーブルセットに、いつものように一人で陣取り、並べた料理を堪能するリリルカであったが……

〝どかっ〟

別に椅子やテーブルを蹴られた効果音ではない。

ただ、空席だった目の前の席……埋まる予定の無かったそこにどっかと腰を下ろした猛者がいるのだ。

無論、某猛者（おうじゃ）さんではない。

ただその男……いや青年は、毛並みや毛色は違うがリリルカと同じような形の獣耳を頭から生やしていたのだった……

第06話：〝ローガさんに『ありえたはずの現在』があってもいいじゃない〟

行き着け料理屋兼酒場の〝豊穣の女主人〟にて、いつものように一人飯（ボッチ）を堪能していたリリルカ・アーデ。

二人がけのテーブルに一人で陣取り舌鼓を打っていたら、埋まる予定のなかった相席にどかっと何者かが腰を下ろす。

精悍と言う言葉が擬人化したような引き締まった筋肉質の体にかつて怨敵であり仇だったモノを象った刺青を施し、白銀の頭髪に揺れる髪と同色の獣耳……

「よお、〝リリルカ〟。相変わらずのボッチメシか？」

「これはこれは。誰かと思えば、ヴィーザルさん家（ファミリア）の〝狼牙（ろーが）〟さんじゃないですか？ボッチも何も、生憎とソーマ・ファミリアにテーブルを囲みたくなるような人間はいませんからねー」

と返しながら、リリはきょろきょろと周囲を軽く見て、

「そちらこそ珍しく一人ですか？　もしかして〝黄昏の孤狼（ロンリーウルフ）ごっこ〟の真っ最中とか？」

「阿呆。だれがそんな寂しい遊びをするか。それと、」

彼は苦笑しながら、

「妙に懐かしいイントネーションだな？」

リリルカ・アーデとヴィーザル・ファミリアの〝団長〟にして〝Ｌｖ５の冒険者〟、ベート・ローガの付き合いは割と長い。

それこそ、彼がＬｖ２の時に与えられＬｖ４になるまで使っていた二つ名、姓をもじった〝狼牙（ろうが）〟を普通に知ってる程度には長い。

無論、今の二つ名は〝黄昏の孤狼（ロンリーウルフ）〟なんて寂しいものではない。

☆☆☆

ベート・ローガは紛れもなくオラリオの誇る〝英雄〟の一人である。

無論、単純な強さで英雄と呼ばれているわけではない。

彼より強い存在は、オラリオの冒険者に限っても片手の指の数よりは多いだろう。

では、何故彼が英雄なのか？　何が彼を英雄に足らしめさせているのか？
言うまでもない。彼の生き様が英雄に相応しいからだ。
そう、彼の波乱万丈に満ちた半生は、まさに「悲劇と栄光に彩られた」……〝英雄譚〟に相応しいものだった。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

ベート・ローガは、狩猟と放牧を生業とする遊牧の獣人部族〝平原の獣民〟、その族

長の息子として生まれた。
生まれ乍らに彼の身体能力は高く、また弱肉強食を是とする部族の気風を体現したような存在で、強さに対し真摯であり、また自己鍛錬に弛まぬ努力を続けた。
一族の誰もがベートが父を越える良い族長になると期待していた。
そう、それはベートにとっても家族にとっても約束された未来だった……いや、そうなるはずだった。
だが、彼が１２歳の誕生日を迎える日……悲劇が襲った。

〝平原の主〟
その竜型のモンスターは、そう呼ばれていたらしい。
そして、そう呼ばれるほどの強さを誇る……ダンジョンの外側であれば、規格外もいいところのモンスターだった。
〝平原の獣民〟は誰一人、〝神の恩恵（ファルナ）〟をその身に刻んでいなかった。
そんな彼らが一丸となっても、勝てるような相手ではないのは自明の理だった……

ただ一人生き残った幼き日のベート・ローガの目に映ったのは、あまりに凄惨な光景だった……

食事よりも短い時間の間で父が、母が、妹が、一族が、そして……将来を誓い、共に一族を守り立て引っ張っていこうと約束した幼馴染が物言わぬ骸となり散乱していたのだった……

なぜ、〝平原の主〟が高々遊牧獣人族を襲ったのかは、今となっては誰にもわからない。

単にたまたま通り道に〝平原の獣民〟が野営していただけなのかもしれない。

理不尽だった。何もかもが。

だが、その理不尽を何食わぬ顔で行えるのが圧倒的なまでの〝力の差〟だった。

例えば、である。

子供の頃、面白半分に……いや、面白さのためだけにアリを踏み潰したり、あるいは大人になった今では考えられないほど無慈悲に他の動物や昆虫の命を奪った記憶はないだろうか？

〝平原の主〟と〝平原の獣民〟の間に起こったそれは、突き詰めてしまえばそれらの行動と大差ない。

ただ、たまたま踏み潰された側が、感情をもてるほどの知性と思考を持ち合わせていただけだ。

そして、その情景を嗚咽と慟哭と共に魂に焼き付けたベート・ローガは、優しい日々

をくれた愛しい者達を弔い、迷宮都市オラリオへと足を向けた。
二度と『理不尽に踏み潰されない』ために……

だが、その街でベート・ローガを待っていたのは、原作と呼ばれる世界と似て非なる運命の連鎖だった。

第07話…〝ローガさんが英雄でもいいじゃない〟

とりあえず神酒（ソーマ）くらいしか売りのないソーマ・ファミリアのＬｖ１冒険者リリルカ・アーデと、新進気鋭のヴィーザル・ファミリアの中で頭角を現しつつあったＬｖ２冒険者ベート・ローガの出会いは、特にこれと言ったドラマのないものだった。

これが出会ったのがダンジョンの中、それも強いモンスター相手に共闘したというのなら申し分ないが、二人の出会いはギルドの魔石換金所という色気も浪漫もあったもんじゃない場所で、しかもたまたま二人が同じ窓口の列に並んでたというだけだった。

その頃のリリルカは両親が死んでソロ・アタックばかりしていたし、ベートはファミリアの団員とパーティーを組んでダンジョンアタックするのがメインではあったが、その日はたまたま自己鍛錬をかねてソロで潜っていた。

「チッ……今日はやけに混んでやがるな」

そうベートが舌打ちするとたまたま前に並んでいたリリルカが、

「まあまあ。こんな日もありますよ。換金する冒険者がこれだけいるなんて、景気がい

い話じゃないですか。まあ……これで魔石が過剰供給になり買い取り価格が暴落でもしたら目も当てられませんけどね」

それが二人の最初の会話だったらしい。

☆☆☆

リリルカとベートは妙に馬が合ったらしい。

〝犬と狼なのに馬が合うとはこれにかに？〟とほざきたくもなるが、近似種の獣人というのも存外無視できない（リリルカはハーフだが）のかもしれない。

それに二人とも強さに対する渇望が似ていた。

理由も経緯も、何より失ったモノに対する思いが正反対ではあるが、共に家族を〝理不尽な力〟により奪われている。

ベクトルも違う。質も違うが……それでも確かに二人は貪欲に力を欲していた。

結果、身の安全のためにもほとんどファミリアに帰らず、団員に知られないように確保した〝隠れ家（ネスト）〟を転々としながらソロ・アタックを繰り返していたリリルカは、いつしかヴィーザル・ファミリアのダンジョン・アタックに誘われるようになっていた。

これに焦ったのは、ベートに想いを寄せていた後のヴィーザル・ファミリア副団長

だったりするのだが……

リリルカとベートの出会いが、何を齎したのかを正確に書くのは難しい。
ネガティブな部分もポジティブな部分も両方あった。
例えば、リリルカがヴィーザル・ファミリアの中層へのパーティー・アタックに参加していることをどこからか聞きつけた下っ端ソーマ・ファミリアの団員が、なんだかんだと因縁つけて金をせびりに来たのは明らかにネガティブだろう。
だが、当時ファミリアで切り込み隊長的な役割を担っていたベートがソーマ・ファミリアに半ば殴りこみ、「戦争遊戯」をちらつかせ、結果的にはリリルカのバックにヴィーザル・ファミリアがいることを知らしめることとなり、少なくともリリルカにとってはポジティブだったろう。
だが、騒がしくも過ぎてゆく日常の中で少なからず〝変化〟が生じた。
リリルカ・アーデという存在に触れた、自分と似て非なる考えを持つ少女を知ったベート・ローガは少しだけ物事を広く、そして柔軟に考えられるようになっていった。

やがて、ベートは大きな決断を行うこととなる。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

月日が流れＬｖ３の冒険者となったベート・ローガは、仇……〟平原の主〟を討つことに決めた。
だが、それは決して一族を根絶やしにされた怨恨ではない。
ただ、自分が前へ進むための過去の清算……〟ケジメ〟だった。
だからこそ彼は、自分だけで討つことに固執しなかった。
手伝いを申し出た者達を拒絶したりしなかった。
確かに彼の一族は滅んだ。だが、ベートは確かに〟群れを率いる長〟としての成長を果たしていたのだ。

だから彼は決断する。
そう、〝かつての家族達〟の仇を討つために、今の〝大事な仲間達〟と戦うことを。
ヴィーザル・ファミリアの団長となるまで成長したベートは、そう決断したのだ。

☆☆☆

戦いは熾烈を極めた。
その背に神の恩恵を刻んでもなお、容易に勝てぬ存在……それが〝平原の主〟という怪物だった。
比喩でなく火花を散らすの中で尊い命、仲間の命も失われた。
そして、副団長となっていた彼を慕う少女の命も消えた。
だが、彼女は最後まで微笑んでいた。
一緒に戦い、最後に愛しい男の腕の中で看取られ逝けるのだ……そこになんの後悔もないと。
『ありがとう』
ただ、出会えた感謝……それが彼女の最後の言葉だった。
ベート・ローガは咆哮する。

もう誰も失わせない、全ての理不尽を振り払うと!!

そして……討伐に同行していたリリルカ・アーデは、英雄譚その一節の目撃者となる

!

第０８話：〝ローガさんが『導きし狼』でもいいじゃない〟

副団長をはじめ多くの犠牲を払いながらも、ヴィーザル・ファミリアはオラリオへと凱旋する。

街は新たな英雄の誕生に大きく沸きかえった。

当時のオラリオは、まだ闇派閥（イヴィルス）が跋扈した時代で何かと暗い話題が多かった。

そのせいか、久々の〝偉業〟と呼んで差し支えの無い明るい話題に人々は飛びつき、大いに喜び喝采し、半ばお祭り状態でヴィーザル・ファミリアの凱旋を称えた。

そして寡黙な男神は、ただ『よくやった』の一言で彼らを迎えたのだった。

☆☆☆

神々もその偉業を認め、Ｌｖ４へとランクアップを果たしたベートに〝導きし狼（アセナ）〟の

二つ名を贈ることを決めた。
一族でただ一人生き残り、それでも再び立ち上がり群れを率いて苦難に立ち向かった彼こそ、その名を名乗るに相応しいと。
神話のアセナはメスの狼だが、神々の間ではそれは些細な事と判断されたようだ。
性別よりもベートの生き方こそ、まさにアセナ的であると評された。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

その後、ロキ・ファミリアと共同戦線を張り闇派閥（イヴィルス）を討伐するなどダンジョン内外を問わず数多の冒険を経て、ベートはＬｖ５へと昇格し現在へと至る。

また、ヴィーザル・ファミリアはその高めた名声の効果もあり、入団希望者に溢れた。
ファミリアと言う群れを率いる団長（おさ）としての自覚が磨かれたベートが選考を厳しくするも、それでも団の規模は大きくなり、失った人数以上の新規入団者を抱えることとなった。
そしてベートは……良い意味で変わらなかった。
確かに大切な者、かけがえのない者は失った。
だが、それでも感謝の言葉を遺し彼女は逝った。
後を……遺された者を頼むと仲間たちは告げて逝った。
傷は簡単には癒えないかもしれない。
もしかしたら一生消えない傷痕（きずあと）なのかもしれない。
だが、彼には共に戦った仲間たち（ファミリア）がいたのだ。
ベートは、先に天へと旅立った〝家族〟達に花を手向けながら願う。
『いつか俺もそっちに逝くだろうが……その時まで精々楽しくやってろや』
ベートは決して散っていった命を忘れない。
だが、それは過去を引き摺ることではない。
彼はちゃんと前を向き、今日も先頭を走り〝群れ（ファミリア）〟を率いる。
それが、長としての正しい姿であると信じて。

☆☆☆

さて、時間は再び現在へと戻る……

〝ひょいぱく〟

「ふむ。けっこういけるじゃねえか」

リリルカの注文した山盛りのから揚げをつまみ食いするベートに、

「ローガさん、お行儀悪いですよ？」

「細かいことを気にすんじゃねーよ。今更、テーブルマナーだのなんだのを気にするようなお上品な店でもねえだろ？」

「それはそうですが……」

〝ヒュン〟

だが、どこか暢気そうな雰囲気の中で、唐突にベートの顔面へとテーブルナイフが飛んでくる！

「おっと」

〝ぴっ〟

だが、彼は何の苦も無く人差し指と中指の間に挟んで止め、

「おいおい、危ねえだろ？」
「失礼、お客様。手が滑りました」
『どんな手の滑り方をすればこうなるんだ？』と常人なら問い詰めたくなるだろうが……だが、ベートも彼の視線の先にいた〝ウエイトレス服に身を包んだスレンダーな女性〟も生憎と常人とはかけ離れた存在だった。
「ああ、そういえばまだ注文を承ってませんでしたね？　なら、まだお客様未満と言うことで問題ないです」
その挑発と捉えられても不思議じゃない言い回しにベートはにやりと笑い、
「鼻っ柱の強さは相変わらずじゃねえか。安心したぜ、〝腐れエルフ〟」
「そちらこそ、〝私の恩人〟に無造作にチョッカイかけるのをやめてほしいのですが？〝脳筋狼〟」

彼の視線の先にいたエルフ少女の名は〝リュー・リオン〟。
〝豊穣の女主人〟の店員であり、かつてはギルドのブラックリストにその名を連ねた元〝復讐者（リベンジャー）〟である。
付け加えれば……リリルカの古い友人でもあった。

第０９話：〝アーデさんとリオンさんの出会いがダンジョンでもいいじゃない〟

ベート・ローガほどではないが、リリルカ・アーデとリュー・リオンとの付き合いも結構古い。

いや、古いのもさることながら二人はかなり〝マズい〟時期に知り合ってる。特にリューの精神的な意味において、だ。

リリルカ・アーデは元々、リューの顔と名前くらいは彼女がアストレア・ファミリアにいた頃から知っていたらしい。

だが、その縁を決定的にしたのは……よりによって、

「はぁ～……まさか、こんなシーンに出くわすとは思いませんでしたよ」

それまで遠目でチラリとダンジョンで見ることがある程度だったリューをしっかりと瞼に焼き付けることとなったシーン……それは〝１８階層〟で遺品である武器を墓標に使い、仲間達を弔ってる姿だった。

「何者っ!?」

深すぎる闇が蟠る……憎悪と怨念が渦巻く吊りあがった瞳に、竦むような感覚を覚えながらもリリルカ・アーデは両手をあげ、

「ソーマ・ファミリア所属のリリルカ・アーデ。ソロでしか潜れない、ただのしがない冒険者ですよ」

その日、リリルカは〝平原の主〟との戦いでやせ細った戦力を完全に回復したヴィーザル・ファミリアの中層アタックに同行していた。

そして、休憩中に〝リヴィラ（ぼったくり）の街〟に行く気にもなれず、気まぐれに散歩してる時にそのシーンを目撃してしまった。

リリルカは聡い。

ダンジョンの中とは思えない美しくも静かなこの場所で、半ば朽ちた武具を地面に突き刺す意味を理解できないわけはなかった。

「何があったかは聞きませんが……回収する遺品はまだあるんですか？」

「……ある」

短くそう返したリューにリリルカはため息一つを突いて、
「ならいきましょう。リリが言えた義理じゃないかもしれませんが、盗難にでもあったら目も当てられない」
「……どうして？」
その言葉の意味くらいわかる。
『何の関係もないお前がなぜ？』ということだろうと。
「さあ。強いて言うなら、きっと……」
リリルカは考える。
なぜ、自分がこんな一文の得にもならないようなことをしようとしてるのかを。
「きっと、リリは貴女が羨ましいんです。リュー・リオン」
「……？」
「仲間を弔うためにそんな表情（かお）ができる貴女が。リリは、きっと誰が死んでもそんな表情はできないでしょうから」

ただ、ダンジョンの中の僅かな邂逅……二人はきっとそう思っていた。
リリルカにとっては特に理由もない、ただし彼女にしては珍しいお節介だった。
リュー・リオンは何でリリルカの提案を受諾したのか、今でも上手く説明できない。
ただ、特に意味もなく二人は出会った。ただの偶然のはずだった……だが、再会は思ったよりも早かった。
「これはまたなんとも」
いつものようにソーマ・ファミリアに帰らず、ダイダロス通りにある隠れ家に向かい裏路地を歩いてたときにそれを目撃してしまった。
そう、見覚えのある若いエルフが見知らぬヒューマンの心臓に刃を突きたてる瞬間を。
（これは〃発展アビリティ〃が仇になりましたか……）

〝平原の主〟討伐に参加し、ヴィーザル・ファミリアではないもののその一員として戦ったリリルカは、誰にも知られずＬｖ２冒険者へとランクアップを果たしていた。

本来、ソーマ・ファミリアではランクアップどころかステイタス更新さえ有料、それも高額なはずだが……リリルカはある出来事から、秘密のうちに神ソーマの寵愛を受ける身となっていた。

それは言うならば団長のザニスですら知らない〝秘密の関係〟であった。

元々隠れ動くことを得意とするリリルカは、誰にも知られぬよう主神と逢瀬を重ね、こうして無事にＬｖ２へと至ったのだが……

（〝隠者行（ハーミット）〟の効果が高すぎるのも、場合によっては考え物ですね）

血塗られた切っ先を向けられながらも彼女は酷く冷静で、

「リリの顔を覚えているのなら、刃を下ろしてくれると助かるんですけどね？　リュー・リオン」

それは刺激的と言うには物騒すぎる再会だった。

発展アビリティ：〝隠者行（ハーミット）〟

・気配を希釈する

・認識を希薄化する

・効果は冒険者Ｌｖに比例する

・任意に発動可能

リリルカ・アーデの内面や行動が反映された発展アビリティ。

第１０話：〝アーデさんがリオンさんの『共犯者』でもいいじゃない〟

「〝復讐者（リベンジャー）〟に堕ちましたか……リュー・リオン」
「まあ、いいんじゃないですか？　リリは賛成も反対もしませんが……それが今の貴女の生きる糧だというのであれば、全肯定もしましょう。どんなものであれ、生きる理由があるというのは悪いことじゃありませんし」
　彼女自身でも少し白々しい気もしたが、意外な事にそれはリリルカの本音でもあった。
　だからだろうか？　リリルカがこんなことを言い出したのは。
「なんだったら協力しましょうか？　ああ、人殺しの直接的なのは勘弁ですが、隠れ家の提供や食料や物資の調達なら受け持ちますよ？　無論、無償と言うわけにはいきませんがね。きっちり対価はもらいます」
「なぜ？ですか……そうですね、大した理由ではありませんよ」

彼女はシニカルに笑い、

「リリはとても歪んでるからでしょうかね？」

どういうこと？

「リリは嬉しいんですよ。光届かぬ地下迷宮（ダンジョン）の中においてさえ自ら輝いていた貴女が……自らがオラリオの正義と秩序の番人だと肩で風を切っていた貴女が、」

いくつか確保してる隠れ家の合鍵を投げ渡し、

「リリと同じ〝暗がり〟に堕ちてきたことが、ね」

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

復讐を一応は成し遂げたリューは、数奇な運命（シル・フローヴァにお持ち帰りされたとも言う）を経て〝豊穣の女主人〟に雇われの身となる。

シルがリューを拾ったのは偶然かもしれないが、全てが偶然とは言い切れない部分があるのだが……

とはいえ影から支えたがしばらく姿を見なかった、あるいは隠れ家（ヤサ）を使った形跡がなかったため死んだかと思っていたリューが、行き着けの店（豊穣の女主人）でウエイトレス姿でいたのを目撃したときリリルカはあんぐりと口を開けたものだが……

だが、ばつが悪そうな顔で再会する彼女にリリルカは自然に微笑んでいた。

☆☆☆

さて、時節は再び現在に戻る……

ベートはリリルカの差し向かいに座ったまま自分の注文を行い、それを持ってきたリューはちゃっかりリリルカの隣に座りお酌のサービスと言うレアな風景だ。

彼女がそろそろシフト的に休憩と言うのもあるが、リリルカは開店当時からとは言わないものの古株のお得意様、毎度その小さな肢体のどこにそんなに入るのか？と生命の神秘を感じさせる上客だ。

この位のサービスは大目に見る大柄……もとい。大らか店主（ミア）である。

もっとも、彼女が昵懇な関係にある某女神のお気に入りというのもあるが……

「ところでリリルカ、お前いつまで〝Ｌｖ２（ソコ）〟にいるつもりなんだ？」

リリルカがＬｖ２に昇格したのは〝平原の主〟を駆逐した直後……ギルドにはソーマ・ファミリアの抱える諸事情があるため報告してないが、その事実を知る数少ない人物であるベートは厚手の肉を噛み千切りながらそう疑問を呈した。

「それは私も疑問だった。リリの力量ならとっくに〝上〟へいける」

と不本意ながらベートに相槌を打つリュー。

リューもまたリリルカがＬｖ２であることを知るレアな存在であり、また現状のリリルカの強さ……「Ｌｖ２冒険者にあるまじき戦闘力」はよく知っていた。

それもその筈で、リリルカがかつて協力を申し出る代わりに要求した対価は、金銭ではなく「戦闘訓練とダンジョンでのノウハウの伝授」だった。

つまりリューもまた、ベートと同じく言うならば〝リリルカの師〟の一人なのだ。

そして、その師弟関係も未だに続いている。

リューに言わせれば、「腕と勘を鈍らせない程度のトレーニングにリリルカがつきあってるだけ」ということになるのだが。

「リリにも色々と思うところがあるのですよ。当然、今のレベルで足踏みしてるのも理由はあります」

リリルカはとある理由から神ソーマの寵愛を一身に受ける身だ。

だから今のパラメータを見る限り、いつでもＬｖ３に上がれるはずだった。

実際、彼女はＬｖ２になった時点で発現した発展アビリティ〝隠者行（ハーミット）〟を駆使してソーマ・ファミリアの団員に気づかれないまま頻繁に主神（ソーマ）と逢瀬を重ね、細かくステイタス更新を行っていた。

「例えば、現在公的なリリの冒険者Ｌｖは１ですから、今以上にあげると流石に誤魔化しづらいですし」

どこぞのファミリアでは大半がレベル詐称をしてる疑惑があるが……それはよい。

リリルカは最後のから揚げを飲み込み、

「だけど、そろそろそれも潮時なのかもしれませんね」

腕を組みスッと目を細め、

「どうやらリリの実力が団長（ザニス）に勘付かれたようです……刺客を送られました」

カヌゥたちのことなのだろうが、ベートもリューも驚くような反応はしなかった。

ソーマ・ファミリアの体質やザニスの性格を考えれば、遅かれ早かれこうなることは予想できた。

リリルカ、いや神ソーマが彼女のレベルをギルドに申請しなかったのも、こうなる事態を少しでも先延ばし……リリルカが、それを跳ね返せる実力をつけるまでの時間稼ぎと言う意味合いもあった。

むしろよくぞ今まで勘付かれなかったと上手く立ち回りファミリアの団員を欺き続けてきたリリルカを褒めてもいいぐらいだ。

「スキルのおかげで力と耐久は未だに景気良く伸びてますが……他のパラメータが頭打ちになってきてます。そういう意味でも頃合かもしれません」

「やるのか？」

ベートの言葉にリリルカは小さく頷き、

「ザニスの動向は把握済み。今夜で決着をつけます……!!」

第１１話：〝たまにはルストラさん視点があってもいいじゃない〟

その日、ソーマ・ファミリア団長〝ザニス・ルストラ〟は非常に苛立っていた。
いつまで経っても望んだ報告……自分の地位を脅かしかねない実力者、〝リリルカ・アーデの死〟を知らせる報告が入ってこないのだ。
おかしい……そう思ったのはつい最近のことだ。
ふと、ファミリアの外でとある〝表沙汰にできない相手〟と会合していたときに、ふとリリルカ・アーデの名が出たのだ。
その前後はよく覚えていないが、その男が
『リリルカ・アーデはソーマ・ファミリアなんだろ？　使い物にならん飲んだくれの集団かと思っていたが、中々どうしていい手駒がいるじゃないか？　戦闘狂のきらいはあるが、それを含めても悪くない』
そう言ってたのは覚えている。

ふと、思った。

（リリルカ・アーデ？　どんな奴だったか……？）

ソーマ・ファミリアは全員を把握できないほど大きなファミリアではない。

だが、不思議なほど印象がなかった。

それもザニスはすぐに合点が言った。

ザニスはソーマ・ファミリアの実権を握るために『上納金制度を設定し、上納金の上位者のみ報酬として神酒（ソーマ）を分配する』というシステムを考案した張本人だ。

基本、ソーマ・ファミリアの団員は神酒目当てに集まってきたゴロツキと言っていい。

故にこのシステムは効果覿面だったが……

（おそらく、一度も上納金上位者に名を連ねていない……）

なら、自分が覚えていないのも無理はない。

その日は、そう思った。

☆☆☆

だが、後日リリルカ・アーデの名が妙に引っかかっていたザニスは、記憶の糸をたぐりよせる。

すると自分と彼女に唯一、印象深い……それもネガティブな意味での接点があったことを思い出したのだ。

団員の一部がリリルカがヴィーザル・ファミリアに入り浸ってることを嗅ぎつけ、金をせびりに行ったらしいのだ。

それが向こうの獣人の団長の逆鱗にふれ、半殺しで簀巻きにされ連行された挙句、「戦争遊戯」を仄めかされた。

相手は新進気鋭として知られていた規模は中堅の下の方とはいえ武闘派揃いの探索系ファミリアで、団長に至っては既に当時Ｌｖ３の冒険者だったのだ。

対して自分たちはＬｖ２が自分と飲兵衛で生意気だが、飲んでれば基本無害なドワーフだけ。残る団員は膨大な金銭が要求される上に「金を持っている」と付け狙われかねないレベルアップより、神酒目当てに金を使うためにＬｖ１ばかりだ。

だからこそ、そんな顔も良く覚えてないような団員のために勝ち目のない戦いをする気はないザニスは、リリルカに一切干渉せずとした。

約束を違えば、即座に「戦争遊戯を執行する」と脅されもしたので頷くしかなかった。

この男、基本小心で臆病なのである。

だが、それ以降にリリルカの名を聞いた覚えはない。

不自然だった。
そのエピソードがあってから、記憶が正しければ数年の月日が流れたはずだ。
改めて上納金のリストを見ると……
（上納金自体が、全くの〝未納〟だと……!?）
上位者どころか名簿に名こそあるが、その上納金額は常に0を刻んでいた。
酒目当てのソーマ・ファミリアの団員としては明らかな異端だ。
これを不審に思ったザニスは団員達にリリルカのことを聞いて回った。
比較的団員歴の浅い者が
『あれ？　そんな奴いたっけ？』
という反応だったが、
『ああ、奴ならダンジョンに頻繁に潜って荒稼ぎしてるってよ。ちょっと前に奴を襲いに行くって息巻いていた連中がいたが……そういや、最近見ないな』
そんなコメントが返ってきた。
自分が作った組織とはいえ、あまりの横のつながりの薄さに頭を抱えたくなったザニスだったが、自業自得と考えないところがいかにも彼らしいといえた。
そこでザニスは渋々ながら大好きな金を使い、リリルカを調べさせた。
判明したのは驚愕の結果だった。

☆☆☆

リリルカは、あれでも極力自分の行動を目立たぬようにしていた。

例えばＬｖ１時代、〝平原の主〟討伐の功績で沸き返るオラリオの街に凱旋するヴィーザル・ファミリアを尻目に、彼女は一行の荷物に紛れてコッソリとオラリオに帰って来た。

公式にも非公式にも、リリルカが討伐遠征に参加した記録も文章もない。

あるのは参加し、生き残った者達の記憶の中だけだ。

そして、ザニス不在のときを見計らい気づかれぬようにソーマ・ファミリアに忍び込み、神ソーマの手でＬｖ２に昇格した後は発現した強力な発展アビリティの恩恵もあり、これまで以上に「気取られることなく大胆な活動」を取るようになった。

それが結果としてリューとの縁に結びつくわけだが……当たり前だが、リリルカは常に〝隠者行（ハーミット）〟を発動させているわけではない。

今でこそ呼吸するようにオン／オフを切り替えられる……と評するのは大袈裟にしても大分扱いに慣れたが、本来その発動には高い集中力がいるのだ。

だからこそ、発展アビリティを発動させてないリリルカは実はかなり目立つのだ。

何しろ犬耳と尻尾を生やしたパルゥムが、身長より長い柄の付いた巨大なウォーハンマー担いでダンジョンを一人でうろうろしてるのだ。

これで目立つなと言うほうが無理だろう。

蛇足ながら、リリルカがその「団員らしくない行動」からソーマ・ファミリア所属だと知る人間が驚くほど少なかったことも追記しておく。

おかげで情報はすぐに集まったが……それを見た瞬間、ザニスの全身から冷や汗が流れた。

（Ｌｖ１なんてもんじゃねぇ……!!）

一例を挙げるだけでも、リリルカは〝単独（ソロ）で何度も〟、１８階層……通称〝迷宮の楽園（アンダー・リゾート）〟を訪れているというのだ。

１７層にいる階層主のゴライアスを単独で倒す……なんて馬鹿げたエピソードは流石になかったが、それでもＬｖ１が地上とアンダー・リゾートをソロ往復すると聞いて「凄いね」で済ますほどザニスも愚鈍ではない。

おかしい。

明らかに異常だ。

そしてザニスはその異常を可能とする唯一の存在を知っていた。

敬うフリをして内心は見下げはてている神ソーマだ。
リリルカがどういう事になってるのか問いただそうとした刹那……いきなり神威を天界に戻されない程度に開放された。
『リリルカ・アーデに関して問うことは一切許さん』
決まりだった。確定的だった。
だが、同時に手詰まりになった。神が神たる所以の力を見せるのであれば、自分たちが無力であることをザニスは思い出したのだ。
結局、ザニスは状況証拠的に「限りなく黒」であっても、リリルカが極秘裏にＬｖ２に至っていた確証は得られなかった。
そしてだからこそ不気味だったのだ。
酒に溺れることもなく……それは自分の意に従わないことを意味し、そんな者が自分と同等の力を持つかもしれない推定Ｌｖ２冒険者としてファミリアに存在することが許しがたかった。
それは根本的にはリリルカに対する恐怖心だった。
そして繰り返すが、ザニスの本質は小心の臆病者だ。
だから恐怖と向き合うことを由とせず、排除することに決めたのだ。

だが、ザニスは詰めが甘かった。

単にケチたのか秘密の漏洩を恐れたのかは不明だが、〝後ろ暗い副業〟のツテで知り合った「対人戦のプロ」へ相応の金額を積んで外注するのではなく、自分たちの身内で全てを処理しようとしたのだ。

カヌゥ達はＬｖ１ではあるが、キラーアントを用いた〝怪物進呈（パスパレード）〟を誘発させれば抹消できると考えていたのだ。

確かに自分を基準にすれば正解だろう。

だが……結局、ザニスは情報を得ようともリリルカ・アーデと言う少女を全く理解していなかったのだ。

第１２話：〝アーデさんの呪文が変でもいいじゃない〟

其(そ)は真実を映す呪いの鏡なり
汝向けし切っ先は鏡に映る己に突き立てられる
ゆえ貴方の痕(きずな)は貴方のもの、私の痕も貴方のもの
〝魔鏡反呪(シンダーエラ)〟

「おや？　ザニス団長、顔色悪いようですけどいかがなさいました？　神酒(ソーマ)の飲みすぎですか？　いえ、そんなわけないですよね」

クスクスと楽しそうに笑う害意と敵意……

「貴方にとって神酒（ソーマ）は酒の形をした銭に過ぎないんですから」

その夜、ソーマ・ファミリア団長〝ザニス・ルストラ〟は、そのさして長くないだろう生涯においても最悪の状況が訪れていた。

その悪夢の正体は言うまでもない……

「アーデ……貴様、どうやって!!」

「そうですね……リリは誰にも気づかれぬよう忍び込むのは得意なんですよ」

いっそ朗らかに返すのは、巨大なウォーハンマー〝バハムート〟を片手で軽々と玩ぶ少女、リリルカ・アーデだった。

無論、彼女とて今こそ明確な〝敵〟であるザニスに手の内（スキル）を明かすような真似はしない。

どうせすぐ尽きる命ではあるだろうが、これまでの所業を考えれば冥土の土産を持たす意味も価値もない。

「さてさて……どうやらリリが生きていることに驚いてるようですが、」

彼女は嘲笑を浮かべ、

「リリの命（タマ）取りたかったら、ケチって身内の手駒なんて使わずもう少し金を積んで腕の立つ面々を雇うべきでしたね？　最低でもＬｖ３相当くらいの相手じゃなければ話に

なりませんよ」
「い、一体なんの話だ……!!」
「団長、目が泳いでますよ？　それにカヌゥさん達から全部聞いてますから今更誤魔化されても興醒めなだけです」
「……何が望みだ？」
「ちょっかい出してこないのであれば、別にリリには望みなんてなかったんですけどね。ただ、やられっぱなしというのもリリのポリシーに反します」
　リリルカは〝バハムート〟を握りなおし、
「強いて言うなら……その首を所望と言ったところでしょうか？　そろそろ貴方の顔も見飽きてきましたし」
「貴様っ!!　私を殺すと言うかっ!?」
「さあ？　もしかしたら首から上がなくなっても生きてるかもしれませんよ？　リリは浅学につきそんなヒューマンの話は聞いたことはありませんが。それはともかく、助けを呼ぶなら早くした方がいいですよ。ただ、その前にリリの〝バハムート〟が確実に頭を潰すでしょうけど」
　明確なまでの挑発……ここにきてようやくザニスは悟ったのだ。
　そう、〝自分よりリリルカの方が強い〟という想定もしてなかった現実を、だ。

ザニスの行動を思い返せば、状況証拠から考えてＬｖ２に至ったと推定されるリリルカに対し、『自分を脅かす存在になる前に駆除』しようとしたのだ。

つまり〝出る杭を打つ〟行動だった。

だが、ここに致命的な認識の齟齬が生じていた。

ザニスはリリルカがＬｖ２に至ったとしても、自分より弱いと想定していた。

何しろ自分はリリルカの両親が生きていた頃より、いやその前からＬｖ２だったのだ。そもそもＬｖ２でなければ団長にはなれなかった。

なら自分よりＬｖ２の期間が短いリリルカが自分より強いはずはないと、大した根拠のないまま無意識に思い込んでいた。

だが、読者諸兄は既にお気づきであろう。

リリルカは〝あえてＬｖ２に留まっていた〟ということを。

ヴィーザル・ファミリアの〝平原の主〟討伐に参加しＬｖ２に至った後も、リューの一件やら何やらでダンジョンの内外を問わず数々の荒事（ぼうけん）に関わってきている。

そう、リリルカ・アーデは『いつでもＬｖ３になれる』状態だったのだ。

ただ、Ｌｖ３になってしまえば、流石に色々と誤魔化しが利かなくなるのでそうしてなかっただけだ。

実際、冒険者ギルドでも大分前から「リリルカ・アーデのレベル詐称疑惑」は一部で

囁かれていたのだ。
しかし、それが表沙汰になってないのは確たる証拠がないことに加え、ギルドの上層部がどうにもこの件に関しての動きが鈍いからだ。
どちらかと言えば、疑念でしかない現状では静観するという姿勢が暗に見え隠れしていた。

「わ、私を殺したところで……」
だが、ザニスにも一応は奥の手はあった。
たとえリリルカが格上であったとしても、起死回生の手は確かにあったのだ。
「殺す程度の価値はありますよ？　オマケにソーマ・ファミリアもついてきますし」
サラッと言うリリルカにザニスは袖口から隠し持っていた短剣状の〝切り札〟、〝魔剣〟を抜き、
「貴様ごときにくれてやるものかよっ!!!!」
込められた炎の魔法を開放するっ!!

第13話：〝アーデさんがややチートっぽくてもいいじゃない〟

ザニスの放った魔剣、仕込まれていた炎の魔法により比喩ではなく火達磨になるリリルカ・アーデであった……

「ひゃはっ！　ひゃっひゃひゃっ!!　バカめ！　俺に逆らうからこういう目にあう!!」

炎に包まれ今にも燃え尽きそうなリリルカを見ながら気色の悪い哄笑をあげるザニス。

幸い、このザニスの私室はレア素材がふんだんに使われた完全防火・防音仕様、身の危険を感じればすぐに篭れるようにとザニスの性格を反映した現代風に言えばシェルターのような構造だった。

〝人一人を焼き殺す〟程度の炎ならば、使ったところで大きな問題はないはずだった。

だが……

「何がそんなに嬉しいんですか？」
それは正しく悪夢のような光景だった。
そう、紅蓮の炎に包まれながら確かにリリルカは静かに〝嗤っていた〟のだから。
「この炎に焼かれるのは、〝貴方自身〟だというのに」
〝轟っ！〟
まるでその囁きが発動呪文だったかのように炎は翻り、
「ぎゃあっ!!?」
放ったザニス自身を喰らい尽くす!!

☆☆☆

リリルカ・アーデの魔法、それは言うまでもなく〝魔鏡反呪（シンダーエラ）〟だ。
その効果は、
・受けた攻撃を放った相手に〝反射〟する
・反射できる上限は、術者の完全致死量（オーバーキル）に該当（つまり一撃致死は反射できない）
・魔力消費は反射量に比例
・解呪か魔力枯渇に陥るまで効果は継続

という恐るべき攻撃性防御特性（アクティブ・ディフェンス）を内包した魔法だった。

「鏡を己の姿を反射し映す」、「自分に向けられた悪意／敵意／害意の篭った力は呪いと同じ」、「鏡は太古より魔除け……呪詛を跳ね返すものとして祭られてきた」などの事象が詠唱術式から推察できる。

そしてある意味、「今の自分以外の誰かになりたかった」という想いが溢れた原作リリルカとの決定的に違う内面が、この魔法の本質なのかもしれない。

細かい推察はともかく、つまりはザニスの放った魔法は『リリルカを殺しきれる威力』はなかったのだ。だから反射され、その威力がまんま本人に返ったということだ。

単体でも破格と言っていい能力を持つ〝魔鏡反呪（シンダーエラ）〟だが、リリルカが〝剛力無双（ゴリアテ）〟以外に持つ〝もう一つスキル〟と組み合わされることにより、更なる相乗効果を発揮する。

Ｌｖ２昇格時に発現したそのスキルの名は、

〝難攻不落（ヴェルダン）〟

・耐久上昇。レベルに応じて上昇値は拡大する

・耐久の経験値獲得に補正。また上限解除

・精神／肉体を問わず状態異常無効化

・消耗に比例して耐久が大規模補正

というレアであると同時にまたしても強力なものだった。

常時耐久は上方修正され、また経験値も上限を無視して伸びやすく、状態異常にも強い。

だが、特筆すべきは〝消耗に応じて大きく補正される耐久値〟だ。

平たく言ってしまえばスパロボなどに出てくる〝底力〟と同種のアビリティで、残りＨＰが少なくなればなるほどリリルカは〝硬く〟……斃しにくくなる。

突き詰めてしまえば、オラリオにいる全てのＬｖ２冒険者の中でも、リリルカは極め付きの〝斃しにくい／斃されにくい〟冒険者なのだ。

某狼人に言わせれば、「薄さと小ささに反比例するような頑強さを誇る盾」だそうな。

何しろとあるモンスターの突進をまともに喰らい、弾き飛ばされダンジョンの壁にめり込むような目にあっても、「痛いじゃないですか！」と大したダメージを負った様子もなくあっさり再起動し、〝ババムート〟で平然とどつき返すような娘なのだ。

無論、この時は……というか普段は、耐久の経験値を上げるために意図的に魔法は使っていない。

いや、命の危険を感じる時以外、基本リリルカは魔法を使わないのだ。

それ故に、その小柄な肢体に見合わぬ圧巻の耐久力を誇るリリルカにとり、ザニスの

放った炎は残念ながら命を燃やし尽くすには到底足りなかった。
何しろヘルハウンドの放火を、サラマンダー・ウール無しにまともに喰らっても耐え切るリリルカなのだから。
だが、Ｌｖ２になってからまともに鍛錬しなかったザニスは……

「まっ、こんなもんでしょう」
既に呼吸はなく、自ら放った炎に炙(あぶ)られただの消し炭となって転がっていた。
あまりに呆気ない……自滅に等しいザニスの最期。それを見つめるリリルカの目に憐憫は無く、ただただ踏み潰された虫の屍骸を見るような目だった。
（これで下準備は終わりましたし……）
だが、彼女の目的はこれでしまいではなかった。
ザニスの首は目的の一つではあっても、目的の〝全て〟ではない。
リリルカには最後の仕上げが残っていた。
（ですが、その前に……）

☆☆☆

リリルカは、ファミリア本拠地の最深部にある扉をノックする。
そこは酒蔵と醸造所が一体となった、ファミリアで最も尊き者がおわします場所で、
「ソーマ様、リリです。入りますよ？」
既に何度も潜った扉を開けたリリルカに、
「よく来た」
少年の姿をとる酒の神ソーマは、微かな……だが、花がほころぶ様な笑顔でリリルカを迎え入れたのだった。

第１４話：〝少しだけ寂しい神様と少女の寓話を挟んでもいいじゃない〟

ソーマ・ファミリア団長ザニス・ルストラをこの世から解放したリリルカ・アーデは、他の団員が拝謁することも叶わない主神ソーマの部屋を訪れていた。
唐突だが……リリルカは神ソーマの寵愛を一身に受ける少女だった。
その切欠は、リリルカが両親をダンジョンで失った直後まで遡る。
皆さんは、『第０４話：〝アーデ夫妻が想定以上にクズでもいいじゃない〟』のラストの方を覚えているだろうか？
両親を失ったばかりのリリルカは、ひどく透き通った目をしていた。
ただしそれは〝美しい瞳〟という意味では断じてない。
それはガラス球のような……何も映さぬ故の透明感であり、無味乾燥の虚空を見る瞳だった。
そこに自分と同じ〝虚無〟を感じた神ソーマは、一杯の盃をリリルカに差し出した。

その盃にはなみなみと完成された神酒が注がれていた。
その時の神ソーマの心情は、〝神の愛〟という類の高尚さとは無縁の物だった。
強いて言うなら「同病相哀れむ」という感情に似た憐憫と僅かな興味……そのくらいだろう。
もしかしたら少しは地上の子に対する愛情はあったかもしれないが、それさえも自覚できない程度の濃度に過ぎなかった。
神ソーマは、リリルカが一度も神酒（ソーマ）を口にしていないことを知っていた。
これまでアーデ一家が入手していた神酒は全て両親の喉に消えていたことを知っていたのだ。
なら、完成された神酒の効果は覿面、五臓六腑に染み渡り、その耽溺は忘れられない快楽として脳に刻まれるはずだった。
だからこそ他の団員と同じく溺れてしまえばいいと思った。
悲しみも空しさも全て忘れてしまうくらい酔い狂えばいいと……
だが、
『美味しい……お酒です』
リリルカはポツリとそう呟いただけであった。
神酒に飲まれるようなこともなければ、溺れる兆候さえなかった。

今なら状態異常無効化スキルである〝難攻不落（ヴェルダン）〟の影響と取れるかもしれないが、そのスキルが発現したのはＬｖ２昇格時、〝平原の主〟討伐参加後だ。この時点では未来の時間軸の出来事だった。

リリルカが何故、神酒に溺れなかったのかは永遠の謎であろう。

おそらく先天的なものだろうが……確証はない。

だが、その光景に誰よりも衝撃を受けたのは、他ならぬ神酒を振舞った神ソーマ自身だった。

リリルカの姿に驚愕し戦慄し、そして酷く心動かされた。

神ソーマは地上の子等に絶望していた。

自分の生み出す酒は、仰々しく神酒（ソーマ）などと呼ばれているが所詮、神の力（アルカナム）を封じて作った〝ただの酒〟に過ぎない。

だが、それでも子等は容易く正気を失い、溺れ堕落していった。

神ソーマにも確かに責められる部分はあるだろう。だが、同時に彼がファミリアの運営を放棄し、地上の子等に背を向け、ただ酒造りにのみ没頭したのは相応の理由があった。

少なくとも神酒を耽溺し堕落する子等を見るたびに、彼の視界はくすんで色を失い灰色に染まっていった。

神ソーマとて地上に降りてきた以上、地上に生きる者達に何らかの期待は最初はあったはずだろう。

だが、それは他ならぬ自分の生み出した神酒により粉砕され、形骸すらも残らなかった。

だから、彼の手に残ったのは酒造りだけだったのだ。

だが、リリルカはそうはならなかった。

彼女に取り神酒は、ただの『美味なる酒』に過ぎず、それ以上でもそれ以下でもなかった。

そう察したときの神ソーマの心情をどう表現したらいいだろうか？

くすんだ灰色に閉ざされた世界が、急に色を取り戻した……あえて言語化すればそうなるだろうか？

だからこそ神ソーマは心揺り動かされた。

心を揺さぶられ、惹かれて行った。

気がついたときにはもう手遅れ。酒造り以外にはじめて動いた感情に戸惑いながらも、彼は自身を止められなかった。

そう、それは数々の神話体系（ミュトス）において、神と人の間では禁断とされるもの……神ソー

マは、リリルカ・アーデを愛してしまった。

☆☆☆

詳細を語るのは、それこそ野暮と言うものだろう。

神ソーマからリリルカに与えられるその感情は、普通の男から女に向けられるそれと変わりはない。

神だから人だからというものではない。

情欲、愛欲、肉欲……それらを内包した思いを、リリルカは起伏に乏しい幼く小さな肢体(からだ)で受け入れた。

例えば破瓜(はか)の痛みさえも、彼女は喜びと歓びと共に受け止めた。

リリルカは嬉しかったのだ。

家族の中での価値を常に神酒(ソーマ)の下に置かれていた彼女は、無意識に愛に飢えていたのだから。

『きっとリリは、神酒じゃなくてソーマ様自身の〝白酒〟に酔ってしまったんですよ。お腹の中に直接ですから、効果は覿面です♪』

多分、問えばリリルカはそう悪戯っぽく微笑みながら答えるだろう。

何度も秘密の逢瀬を重ね、火照った互いの体を晒した一人と一柱……それは刹那的かもしれないが、満たされなかった何かを満たしあう幸せが確かにそこにはあった。
だから、リリルカはその日々を……ソーマとの日々を守るために最後の仕上げを決意する。
リリルカは躊躇いなく全裸になると、
「ホントはこのままいつもみたいに可愛がって欲しいですけど……」
そう名残惜しそうに呟きながら彼女は寝台にうつぶせになり、
「今は先に片付けるべきことがあります」
「そうだな」
主神は彼女がこれから行おうとしてること、その委細を全て承知していた。
「ようやくか……」
リリは小さく頷き、
「ソーマ様、レベルアップをお願いします」
それが何かを成す為に必要な力なればこそ。